九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

横山正著『近世演劇攻』

橘，英哲
筑紫女学園大学教授

https://doi.org/10.15017/11952

出版情報：語文研究. 65, pp.65-65, 1988-06-05. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《紹介》

横山正著『近世演劇攷』

橘　英哲

この度、横山正氏の論文集「近世演劇攷」が刊行された。内容は前集の「近世演劇、研究と資料」同様、前半に論考、後半に資料の紹介、翻刻が配置されている。

次に題目を列記する。

浄瑠璃における加賀掾と義太夫との接点
義太夫節における東風の完成
近松姦通浄瑠璃の再検討
浄瑠璃のもつ歌謡的性格
『まつらさよひめ』の異本について
『三度笠ゑづくし』が意味するもの
加賀浄瑠璃の末流
『曽根崎心中十三年忌』の絵尽について
『ごすいでん』の一異本の紹介
『国性爺合戦座敷軍談』
『日さうき』（草稿）
『追善二腹帯八百屋の段』について
浄瑠璃『熊井太郎孝行之巻』の作者とその草稿
おちよ、半兵衛心中浄瑠璃の追善興行について
『諺尽道斎噺』について
『一周忌（かしく）手向八重桜』の紹介

紙数に限りがあり、略述しかできないのであるが、私にとって興味あるいくつかについて紹介したいと思う。

最初の二つの論文は、曲節の変遷をみることを基本的な方法として論考されたものである。現代では音としての曲節の厳密な復原は不可能といってよい。その曲節を分析、数値化することにより量として把握し、それを比較して曲節を読んでゆくことが、氏の年来の方法なのであるが、節を基本的素材とする場合の浄瑠璃研究の、現在での全き方法であるといえよう。二つめの「義太夫節における東風の完成」は特に精密な数量化であり、豊竹座系の東風の芸への道程が説得力をもって示されている。

三番目の「近松姦通浄瑠璃の再検討」は「女主人公の描写の相違から近松の作風の著作年代的展開を吟味しよう」とされたものである。女主人公の描写の差によってあらわれる近松の創作意識を、御自論の近松世話浄瑠璃における三段階の展開期にあてて論考され、姦通物三作目の『鑓の権三重帷子』において「女主人公の情熱の燃え上がりを強烈に見事におさゑにおいて描き上げ、姦通劇を完成している」と結論づけておられる。近松の姦通物三作品はしばしば比較して論じられるが、焦点のあて方によって多くの見方が可能であり、評価もまたいろいろである。こうした女主人公の側からのアプローチの方法も、今後また種々試みられることであろう。

後半の資料紹介で興味があったのは「浄瑠璃『熊井太郎孝行之巻』の作者とその草稿」であった。氏は綿密な考証の過程を経てこれが『熊井太郎孝行之巻』の草稿であるとされ、その意義を説いておられる。極めて少い浄瑠璃の草稿だけにこの書の今後の研究に果す役割は大きいものであるにちがいない。

以上概略の紹介となったが、緻密な考証と論の明晰な展開に学ぶこと多いことを記して終りとする。

（昭和六十二年六月、和泉書院、A5判、七五〇〇円）